

形容詞による属性叙述表現の構造に基づく意味分析

朴 備徑 (東北大学大学院)

A Semantic Analysis on the Property Predication of Adjectives

PARK, Bokyung (Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University)

1. はじめに

形容詞が述語になる形容詞文は「対象表示部分+解説(属性表示部分)」で構成される(益岡 2000)。形容詞文の構造的な形式の区別に関して、野田(1996: 135)では「比較」の表現を基準に、無題文は比較を表す傾向が強く、有題文は比較を表さない文として位置づけられている。しかし、有題文を無題文と区別するために、無題文の性格を持たないものとして捉えることは形容詞文の有題文の性格を明確にしているとは考えにくい。形容詞文の有題文に焦点を当て事物の属性の分類に基きその性格を論じている研究に益岡(2000)がある。属性の分類には事物の本質的な属性としての「内在的屬性」と、一定の時間的限定のもとで成り立つ「非内在的屬性」がある。事物の内在的屬性に対しては(1a)の有題文では事物の属性を、(1b)の無題文では事物の一時的状態を表現すると益岡は論じている。なお、事物の非内在的屬性(2)と感情形容詞(3)にも内在的屬性と同様の基準で有題文と無題文が区別される。

- | | | |
|------------------|--------------|------------------|
| (1) a. 雪は白い。 | b. 雪が白い。 | (益岡 2000: 45) |
| (2) a. あたりは騒がしい。 | b. あたりが騒がしい。 | (益岡 2000(45)を改変) |
| (3) a. この話は怖い。 | b. この話が怖い。 | (益岡 2000(46)の改変) |

事物の内在的属性の場合は、属性が科学的に証明ができ一般に共有されているものであるため有題文の性格が無題文とはっきり区別できる。しかし、非内在的属性と感情形容詞による有題文の属性叙述表現は何をもって事物の属性の表現として読み取れるかが不明である。本研究では、こうしたあいまいさを事物の属性を認識する話し手(主体)に焦点を当て有題文と無題文の性格を明確にする。

以下では、まず形容詞による属性叙述表現の性格を主体の事物の属性に対する認識に焦点を当てて分析する必要性について述べる(第2節)。それを実証的に分析するために、コーパスを用いて形容詞の属性叙述文を抽出し(第3節)、形容詞の属性叙述文と共起する表現を用いて意味的特徴の分析を行う(第4節)。

2. 主体の環境との相互作用としての事物の属性

形容詞による属性叙述表現に関しては、その構造が格助詞の「は」と「が」の形式を持つため、格助詞選択の問題の一部としてされている(野田 1996)。格助詞「は」と「が」に関して様々な観点が提唱されているが、異なる機能を持つ品詞においてどの観点が優先的であるかを検証することも必要であるだろう。属性叙述文の研究のもう一つの限界として、形容詞に焦点を当てることはあまりなされず、動詞による事象表現に大きな注目が集まる傾向が続いていることである(益岡 2008)。形容詞はよく名詞か動詞の下位分類として扱われるが、事物の静的な属性を詳細に表現できる形容詞の特徴を認め、独立した品詞としての形容詞に目を向ける必要がある。

形容詞の意味は対象に備わる事物(物事も含む)の性質として捉えられ、対象の事物と属性の関係に依存している。上記の益岡(2000)において属性叙述文の性格を記述する際に用いられている属性の概念は事物の性質が反映された。しかし、属性の認知に関わる主体の環境を考慮すると、属性は生き物とも無関係に存在するものではなく、人間と環境の相互作用の結果として理解されるべきである(Lakeoff 1987: cf. 深田・仲本 2008)。例えば、事物の「カバン」に対する「重い」の属性は、カバンその物の重量として述べられるというより、カバンを運ぶなどの活動に関わるときに初めて認識される属性である(仲本 2006)。このように、形容詞によって表される事物の属性の表現は、事物の性質として表されるのではなく、背後にある事物の認知者(主体)の環境において解釈される属性と言える。

事物の属性を主体の解釈として扱う際にさらに考えるべきことは、主体の捉え方である。「カバン」の「重い」という属性に対して、主体は状況によらず常に重いと受け取ることもある一方、状況によってはそう思わないものとして捉えることもある。文法的使用条件と関係せず認知者が物語の登場人物をどのように捉えるかという観点が格助詞「は」と「が」の使い分けに関与することが報告されている(ゲオルギエバ 2008)。

以上のことから、形容詞による属性叙述表現の構造、つまり有題文と無題文の異なる形式を事物の属性に対する主体の認識の相違が反映されるものとして研究していくことが求められる。そこで本研究では、抽象的な主体の認識を実証的に記述できるように、コーパスを用い、属性叙述文の意味分析を行う。それによって、それぞれの形式に主体のどのような意図や観点が反映されるかを明らかにする。

3. データと処理手順

3.1 調査対象

調査対象とするデータには『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用い「中納言」を介して例文を抽出した。対象は形容詞による属性叙述文で、「キー：語彙素読みで用いられる形容詞を入力し、前方共起：キーから3語、品詞は名詞の設定」で検索した。このうち、形容詞の活用形が終止形(例：風はなお激しい。)と連用形(例：この借金が思いのほか重く、)だけを扱った。そして、事物の属性に対する主体の判断が複数の要因から成り立つことを統制するために、連用形での共起表現を最小限にした¹。対象表示部分に関しては、主体が現される事例と、「象は鼻が長い」に代表される対象表示部に連体修飾部のある事例を排除した。このほか、野田(1996)で無題文の性質として取り上げられている「～ほうが」と「一番」を排除した。また、用いられる形容詞のサンプルは主観性に着目した細川(1993)の分類に従った。細川によると、形容詞は感覚形容詞、感情形容詞、属性形容詞、評価性形容詞に分けられる。そして、各タイプでは「わたし」の心の様子を表現することが可能な語群と、そうでない語群に分けられる。この下位分類に従い均等に形容詞を選択した。

3.2 調査結果

本調査は事物の認知者である主体の観点を取り入れ、形容詞による属性叙述表現の性格を分析することが目的である。そこで、有題文と無題文において事物の属性の表現とともに共起される表現の意味分析を行う。そのために、形容詞の4つのタイプごとに均等に共

¹ 連用形で扱われる用例は、「重く、重くて、重いと思った。」の3種類である。以下のような例は排除した。例：後頭部が痛かったそうです。知恵袋がとても重く感じますが。

起表現が収集できるように200件程度の事例数を設定し、形容詞を追加しながら事例を検索した。以下の表1に検索に用いられた形容詞を、意味分類によるタイプごとに有題文(は)と無題文(が)の多い順に表示した。

表1 形容詞の意味分類における属性叙述文の分布

感覚形容詞			感情形容詞			属性形容詞			評価性形容詞		
形容詞	は	が	形容詞	は	が	形容詞	は	が	形容詞	は	が
痛い	17	82	嬉しい	23	42	美しい	37	40	望ましい	10	64
冷たい	29	16	楽しい	43	21	重い	27	30	激しい	22	50
寒い	34	4	つらい	26	15	明るい	28	16	羨ましい	4	27
涼しい	7	1	悲しい	6	5	高い	9	25	懐かしい	3	28
臭い	1	2	恥ずかしい	4	5	赤い	5	7	計	39	169
計	88	105	寂しい	7	2	計	106	118	総数	208	
総数	193		計	109	90	総数	224				
			総数	199							

有題文と無題文の頻度を概観すると、評価性形容詞の属性叙述文の場合のみ有題文より著しく無題文が多い。これは用いられた評価性形容詞の全てにも同様のパターンが見られる。評価性形容詞以外のタイプでは形容詞によって形式の優位性が異なる。次節からは形容詞の意味分類とは関係せず、有題文の342例と無題文の482例を基に主体のどのような認識が形式の使い分けに関与しているかを見ていく。

4. 分析

本研究では、形容詞による属性叙述文の共起表現として、形容詞が示す状態をより明確にする程度副詞や前文の文法成分を主に取り扱う。コーパスから得られた事例の分類の結果、有題文あるいは無題文と共起する表現は択一的に用いられることはなく、その頻度に差が見られた。まずどちらの形式からも高い頻度で見られる共起表現を基に主体の観点の相違を記述し、次により有題文を好む表現、無題文を好む表現を特定する。

4.1 有題文と無題文の主体の観点

有題文と無題文の両方ともに高い頻度を見せる表現として、表2のような程度の高い副詞と比較の成分がある。

表2 有題文と無題文に共通の共起表現

成分	表現	有題文	無題文
程度が高い	とても / かなり / 大変 / なかなか など	74	62
比較	最も / さらに / ますます / 特に など	22	28

4.3節で述べるように、程度副詞のうち程度の低いことを表す場合(例:少し)は有題文と無題文で頻度に差がみられるが、高い程度を表す、特に「とても」は両形式でどの形容詞タイプでも頻度が高い。しかし、異なる形式から異なる主体の観点が見られる。有題文では事物の属性に対する主体の心理との距離が近いが、無題文では主体の心理に周辺の心情ま

が含まれる。次の(4a)のように有題文では主体自身の楽しい感情が前文で表され、「嬉しい」の情意は主体中心の心情である。(4b)では前文の「みんな楽しそうである」の表現から、周りの感情を認識しながらの自身の心情が述べられる。(出典はサンプルID)

- (4) a. その後はわいわいがやがやしながら、楽しい時間を過ごしました。ちょっと忙しい一日でしたが、楽しい一日でもありました。家に誰かが遊びに来てくれる事はとても嬉しいし、その人達の食事の用意をする事も嫌いではない、喜んで食べて貰える顔を見るのが好きなくらい・・・ (OY14_23122)
- b. まわりを見回すと、なんだかみんな楽しそうである。句会は、俳句が好きな人たちと、たくさんの俳句作品との出会いで成り立っている。俳句という、ただそれだけの縁で出会った思いがけなさ。そんな出会いがとても嬉しいと思える。いちばん大切なことは、同じ場にいるということ、同じ空気を吸うということ。 (PM42_00067)

次に、無題文の性質として論じられる「比較」の表現を用いて有題文と無題文を比較すると、2つの形式には事物の属性と主体との関係性の程度に違いが見られる。(5a)は主体の通学路における属性の判断で主体の日常における認識として主体との関係性が強い。一方、(5b)は教科書で抽出された事例で事物の属性に主体の関与は見られない。

- (5) a. 宋世平はこういう辺鄙なところまでカーネル・サンダースを引っ張ってくることはできないんだよな、やっぱり適当なところですよ、と言った。寮から校門まで歩いて十分かかる。夏の夕暮れは最も美しい。雨翔は南三高の広い道を歩きながら、夕日を見てその美しさに驚嘆していた。 (PB29_00231)
- b. 望遠鏡で太陽像を白紙に投影すると、その中心部が最も明るく、周縁部にいくほどしだいに暗くなっている。 (OT23_00083)

以上、有題文と無題文の異なる観点を概観した。属性叙述文と共起する表現はまったく同じであるが、両形式に文脈からの状況と、事物と主体との関係性にはっきりとした相違が見られた。有題文では事物に対する主体の強まった情意と日常の経験と関わる事物の属性が述べられ、無題文では周りの心情を念頭に入れた主体の心情と、主体の間接的な経験の属性が述べられる。ここで注目すべきことは、上記に挙げられた4つの例とも別の形式に置き換えても許容度はそれほど変わらないことである。これは形式の使い分けに文法的使用条件より主体の認識が優先されることを示唆する。

次に、形式ごとに、好まれる共起表現を基に精密な特徴を見ていく。分析は5例以上見られた共起成分を対象にする。

4.2 有題文の共起表現

形容詞による属性叙述表現と共起する表現で、無題文より有題文と好んで共起するものがある。それが表3にまとめたものである。全般的に有題文には主体が事物の属性を持続的なものとして捉える表現が用いられ、またはその属性を主体自身の一部のように受容するような強く率直な心情が表される。

表3 「有題文」を好む共起表現

成分	表現	有題文	無題文
持続性	まだ / ひたすら / 引き続き / 現在でも など	21	6
一般性	概して / 世間一般 / 問わず / 総じて	5	1
時間の経過	もう / すでに	5	0
強い決意	決して / それにしても / かならず / だんぜん / やっぱり / でも	28	5
主体の心情	正直 / さぞ / かくも / 思いっきり	7	1

まず時間副詞を見ていくと、主に感覚形容詞と属性形容詞で「まだ」や「引き続き」などのように事物の属性が現在を基準にして以前から継続する副詞と共起する例が多い。これは、次の一般性の「世間一般」のように時間の継続性を前提とする表現の成分とも類似する。次の(6)の例は両方とも「まだ」が使われ、その形式だけ異なる。有題文(6a)の文脈では主体と事物の属性の関係はないため、無題文の形式に置き換えられる(提示された文脈の前文は無い)。無題文(6b)では渡月橋から山を見上げた時点から認知したその状態に焦点が当てられている。(無題文に見られる主体の観点に関しては4.3節で論じる) この無題文の観点に基づいて有題文の選択を推測すると、有題文の使用を用いて主体の以前の経験の流れの中で物語を始めようとする意図の可能性があるうかがえる。

- (6) a. 耳元で電話が鳴り続けた。仁科はソファの上で起き上って二、三度強く頭を振った。窓の外はまだ明るかった。 時計は五時ちょっと前を指していた。シャワーを浴びてそのままソファに横になったのだが、三十時間ぶりのシャワーが余程効いたようだ。
(LBd9_00131)
- b. 夕暮れの渡月橋から、何気に山を見上げたら、少し時間の早い日没・・・。 夕日がまだ明るくて、 光り輝いていました。貴金属に例えるならプラチナのような輝き・・・。
(OY14_24682)

主体の以前の経験と関連する性質が「もう」、「すでに」のような表現からも見られる。「もう」は当該事態がその時点で突然認識された属性の表現であるより、主体が事物の属性を認識する前に推定していた事柄と関係がある(cf. 仁田 2002: 255)。

以上の時間副詞の共起表現を踏まえると、有題文には事物の属性に対する認識に主体の内的思考が含まれていると言える。そこで、次には主観性の強い表現を用いて分析する。

否定副詞の「決して」や強い判断の「それにしても」のような表現は有題文で表2の程度の高い副詞以外に最も高い頻度を見せる。「決して」は多くの先行研究によると前提を踏まえた表現であり、それにもかかわらず強く打ち消す気持ちが表される。「決して」が用いられる例として、「先行きは決して明るくはない」、「脳は決して美しいとは言えない」のように客観的な属性を表す形容詞との共起があることが興味深い。「それにしても」、「かならず」、「だんぜん」などの場合は、誰かにいくら反論されるとしても事物の属性に対する判断は曲げないという気持ちが含まれる。これらの表現に対して無題文では「やっぱり」の例しかなく、その用法は有題文のそれとは異なる。有題文の(7a)では主体であるアイドルグループのファンがツアーでいつもどおり満喫した感情がうかがえる。無題文の(7b)ではその瞬間

改めて考え直す様子が読み取れる。

- (7) a. めっちゃ楽しかったです。金沢まで来てよかったよ。やっぱりトニセンは楽しいですね。オレキミに手の振りができてました。 (OY14_00565)
- b. その後は、彼女らの大学の話や、元のクラスの子らの近況を聞いたりして盛り上がる。大学は大学で楽しんでみたいやけど、やっぱり高校時代が懐かしい懐かしいって言いながら、昔話に花を咲かせ、、、 (OY08_00329)

次に、有題文と好んで共起する心情表現として「正直」のような主体の内面を表す表現が主に感情形容詞と評価性形容詞のタイプに見られる。そのうち、「さぞ」は話し手の経験上の事物の属性の認識ではなく、他者の経験の事物と関連することで有題文で見られる他の共起表現と性格が異なるとも考えられる。しかし、「さぞ」は他者の経験を対象に共感的に推量する性質を持ち、主体の率直な心情の表現である。また、「さぞ」は当該事態の程度が高い場合だけに使われる特徴を持ち、次節で述べる「少し」とは共起しない有題文の性質とも一致する (cf. 杉村 2003)。

- (8) 客はそれを聞いて杉の枝を立てた普齋の小屋に入り、後入りのお茶を楽しんで帰ったということです。あえての演出ではなく、機に応じての計いとして、こうした機智に富んだ趣向はさぞ楽しいと思います。さて、『淡交』誌連載にあたっては、編集部の堤勇二氏と星原理恵氏に大変お世話になりました。 (LBp7_00014)

以上、形容詞による属性叙述文と共起する表現から特に有題文を好むものを分析した。分析した5つの項目の特徴は次の2点にまとめられる。第一に、事物の属性の認知は当該事態に限らず主体の以前の経験または想定認識と関連する。第二に、事物の属性に関して主体の心情が膨らんでいるような認識が伴われる。このことは、4.1節で分析した有題文と無題文の共通の共起表現から明らかになった有題文に見られる主体の観点とも類似する。

4.3 無題文の共起表現

次に、無題文でより好まれる共起表現としては表4のように「限定」、「理由」などがある。

表4 「無題文」を好む共起表現

成分	表現	有題文	無題文
程度が低い	少し / 少々 / やや / ほんのり / ちょっぴり	0	22
限定性	最近 / 今の季節は / 場合には / ～では など	4	24
条件	ば / と / たら / なら	0	21
理由	ため / ので / から / せいか / せいで	2	11
可変性	いつもではないのですが / なんとなく など	0	6

まず、副詞に関して無題文と有題文を比較しながら分析する。程度副詞の場合、4.1節で述べたように程度が高い副詞に関しては無題文と有題文の両方とも同じ頻度で観察された。しかし、興味深いことに程度の低い副詞は無題文を好む。事物の属性の程度が低く限定さ

れていることは主体とその属性との関わりが低いか事物の一部として認めないことである。「少し」が用いられる例は、(9a)のように事物の属性を解決しようとする文脈が続く。時間副詞の場合は、有題文での「引き続き」とは逆に、無題文では持続する時間を限定する表現の頻度が高い。そして、「場合には」や「にとっては」など、状況が限定される表現の頻度が高い。(9b)では、主体は事物の恒常的な属性として判断せず限定された場合の属性として主体は認識している。

- (9) a. 古い洗面台は撤去してとても綺麗に生まれ変わりました～♪神田佐久間町三丁目、
○伍商会さ～ん♪ありがとうございました！工事を担当した若旦那は俳優の高島
政宏にウリ似のイケ面で～す。洗面所が綺麗になったのに浴室が少々寂し
い……。何か物足りなかったので沖縄で買って来た浴室用のポスターを貼って
湯船に浸かり飲みながら沖縄旅行を思い出すのであります。(OY11_04724)
- b. 頻回な下痢では個室管理が望ましい。(PB24_00252)

次に 無題文で特徴的なのは、条件文の表現の頻度が高いということである。格助詞に関する研究によると条件文は格助詞「は」と共起しないため、当然の結果とも考えられる。しかし、その条件文と格助詞の関係には、従属節の条件文の中の格助詞の使い方が論じられている(野田 1996)。一方、表4の結果は、従属節の条件文をもつ主文の中の属性叙述文の形式が対象となる。そのため、従来の研究と性格が異なると言える。従属節の条件文のいくつかの例は以下のようなものである。

- ・ 感覚形容詞：今朝起きたら、冬になると、喋るために息をすると、触ってみると など
- ・ 感情形容詞：話をすると
- ・ 属性形容詞：それによると、罪名別にみると
- ・ 評価性形容詞：なるべくだったら、ご心配なら、国土交通省からすれば など

条件文との共起は主に感覚形容詞と評価性形容詞に見られる。そして、「それによると」のように事物の属性と関わる出所の例が多い。これは先の「については」や「にとっては」といった他の共起表現とも類似する成分である。もう一つ注目すべき点は、条件文の事柄が主体の事物の属性の認知を引き起こす点である。(10)の肺の痛みは吸気のとくに初めて認知される属性である。

- (10) ここ最近咳をする風邪にかかっています。今日朝起きると、息を吸うと、背中
の肩甲骨の下の少し真ん中よりのところが痛くて息が吸いづらいです。肺がど
うにかなったんでしょうか？ (OC09_03543)

条件文で見られる事物の属性の認知を招くような事柄は「ため」、「ので」などの目的や理由を表す表現とも類似する。ある目的、理由があって生じる事物の属性であり、その目的、理由ではないと同様の属性は発生しない。

最後に注目する相違点は、有題文では以前と同様の属性が持続することを表すものが多いのに対し、無題文では以前とは異なる事物の属性の認知が述べられているという点である。(11)では、施設内の死亡率が以前は高いと言えるほどではなかったのが、事態が変わ

ったことが認識されている。しかし、死亡率が高いという属性が事物の属性として定着していることではないこととして考えられる。

- (11) 二月に入ってから、三階の一般病棟で死者が増えた。療養病棟の患者の病状が悪化すると、一般病棟に移されるのだ。いつもより施設内の死亡率が高いと病院内で噂になった。 (LBs9_00119)

以上、形容詞による属性叙述文で特に無題文と共起する表現について分析を行った。共起表現にはいくつかの種類があるが、その成分には次のような類似点が見られる。一つ目は、時間と状況を区切る限定の表現が多いことから、無題文では主体が当該事態を前の状況や後の状況と関連させず、事物の属性を認知するその時点に注目を向けている。二つ目は、無題文では文脈に事物の属性を引き起こす外的の要因が存在し、事物の属性に対する主体の認識に外的思考が含まれている。これは、4.1節の(4b)で見られた主体の観点とも一致する。三つ目は、4.2節の(7b)と同様に当該事態が通常の状態とは異なるという主体の認識が読み取れる。最後は、程度の低い副詞の共起頻度が高いことから、主体が認知する属性を事物の完全なる性質としては捉えない観点を取る際には無題文を用いると考えられる。

5. おわりに

本研究では、形容詞による属性叙述文における有題文と無題文の性質を事物の属性に対する主体の観点に焦点をあて分析した。大規模日本語コーパスを用いて属性叙述文とその共起表現の調査を行った結果、評価性形容詞以外は有題文と無題文の形式に均等に分布されており、両形式の性質の相違は形容詞の意味とは相関しないと考えられる。

属性叙述文の共起表現の意味分析で最も興味深い相違点は、有題文では「決して」のように事物の属性に対する主体のゆるぎない判断が見られるが、無題文では条件文のように主体の判断に外部の状況が関与し、事物の属性の認識に主体の判断より外的(周辺)思考に焦点が当てられている。これは、形容詞の属性叙述文の形式の選択に事物の属性に対する「主体の安定感の程度」が関係するを示唆する。

参考文献

- ゲオルギエバ, ベロニカ・トドロバ(2008)『「が」と「は」の使いわけとその理由: 母語話者と非母語話者の実態調査を比較して』早稲田大学修士論文。
- 杉村泰(2003)「日本語の副詞サゾの意味分析-「共感」と「程度性」-」『名古屋大学言語文化論集』25:1 pp.67-81.
- 仲本康一郎(2006)「属性の意味論と活動の文脈: 椅子が荷物になるとき」『日本語・日本文化』32 pp.39-61.
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版。
- 野田尚史(1996)『はとが』くろしお出版。
- 深田智、仲本康一郎(2008)『概念化と意味の世界』研究社。
- 細川英雄(1993)「形容詞の主観性について-対象内容による形容詞の分類とその位置づけ-」『早稲田日本語研究』pp.78-65.
- 益岡隆志(2000)『日本語の文法の諸相』くろしお出版。
- 益岡隆志(2008)『叙述類型論』くろしお出版。